

いう女性のバレリーナなど。チェリストのロストロポーヴィチ、作家のソルジェニーツィンも亡命しました。ソ連の芸術家の亡命の問題は、一言でいうと、表現の自由の問題だと思います。ソルジェニーツィンやロストロポーヴィチの亡命は表現の自由をめぐる政府との対決の結果です。ダンサーの亡命も広い意味で表現の自由の問題です。ダンサーは踊れる期間が短く、体が老化するともう踊れませんから、自分のピークの時期に自分の踊りたいものを踊りたい。ところがソ連にいたらつまらない作品しかない。だから体が動くうちに亡命したいと思うわけです。昔の『ホワイトナイツ』という映画に、パリシニコフの亡命の話が出てきました。ソ連時代のバレエは創作作品として見たときに、たしかに面白い作品はないです。冷戦時代、モスクワのポリショイ・バレエとニューヨーク・シティ・バレエのどちらがよりすぐれた芸術活動をしていたか。ジョージ・バラシンが次々と振付作品を発表していたニューヨーク・シティ・バレエの方がすぐれていたと私は思っています。《冷戦とバレエ》について国際関係論的に研究するのが私の「悲願」です。

亡命した人がもう1人。パブロ・カザルスという、おそらく20世紀最大のチェリストです。彼はスペインでフランコの独裁政権ができたときに抗議して亡命して、死ぬまでスペインに帰らなかった。これは非常に政治的な亡命です。この亡命は、スペインのあの政権は認めないというすごいメッセージでした。

他方で、亡命しなかった人を3人挙げます。まず、ガリーナ・ウラノワというポリショイのプリマバレリーナがいました。この人は1950年代のポリショイの華でした。彼女は社会主義ソ連の優等生で、そういう地位にいと社会主義ソ連の問題は見えないので、およそソ連のポリショイ・バレエに対する疑いはなかった。それから、プリセツカヤというダンサーもポリショイにずっといました。彼女の自伝は面白いです。『闘う白鳥』という題名がついています。彼女の『白鳥の湖』はソ連の無形文化財みたいなもので、国賓は必ずポリショイでそれを見ました。彼女はソ連の政権に対しては全然好感は持ってない。でも亡命するのはずい、逃げるなど自伝の中で書いています。

それから、亡命しなかった人としてフルトヴェングラーという指揮者がいます。20世紀中ごろのドイツの指揮者です。戦後、彼がシカゴ交響楽団に呼ばれてアメリカに行こうとしたときに、アメリカのユダヤ人が反対運動をしてつぶれたことがあります。フルトヴェングラーはナチス・ドイツにとどまって演奏活動をしましたから、戦後それを追及されました。しかし彼の立場は「ベートーベンが演奏される場所にはどこにでも自由がある」というものでした。彼は芸術家としてドイツから——ドイツの聴衆から——離れられなかったんだと思います。これは亡命しない1つの例です。しかしこれが協力したと誤解されたわけです。

## 強制収容所を経験した芸術家

20世紀は強制収容所の世紀かもしれない。世界の至るところに強制収容所がありました。ナチス・ドイツの収容所は有名です。働かせる収容所と、絶滅、殺すための収容所とがありました。またソ連の場合、自国民を含めてものすごい数の人が収容所を経験しています。アメリカにもあります。戦争中、日系アメリカ人が強制収容されました。それから大日本帝国でも、いわゆる従軍慰安婦の慰安所がそれにあたると思います。日本軍だけではなく、多くの軍隊にこういうものがありますが、これはその女性にしてみると一種の強制収容所だと私は思っています。

強制収容所を経験した画家として香月泰男という人がいます。この人はシベリアの強制収容所に2年ほどいて帰ってきました。行く前から、東京美術学校の卒業生で新進気鋭の画家だったんですが、徴兵されて、中国大陸に行って、ソ連に抑留されてシベリアに行って、日本に帰ってきて絵を描きました。彼は帰国して10年くらい経った頃から、シベリアの抑留経験を描き始めました。描かずにはいられなかった、これで終わりこれで終わりと思いながらついに死ぬまで57点描いたんです。彼の絵は戦後の日本の絵の中の最高のものの1つだと私は思っています。[画集を投影しつつ]香月泰男は顔が独特なんです。何かのお面みたいな、これは香月泰男の顔なんです。この絵は『朕』という名前。朕というのは、昔の天皇が自分を呼ぶときの一人称です。香月泰男は、このシベリアシリーズの絵に自分自身で説明を付けています。「人間が人間に命令服従を強請して、死に追いやることが許されるだろうか。民族のため、国家のため、朕のため、などと美名をでっちあげて。朕という名のもとに、尊い生命に軽重をつけ、兵隊たちの生死を羽毛の如く軽く扱った軍人勅諭」\*。当時、『軍人勅諭』というものがありません。天皇の言葉で、兵隊が全員持っていて暗記していたんですね。「軍人勅諭なるものへの私憤を描かすにはいられなかった。敗戦の年の紀元節の宮庭は零下30度あまり。小さな雪結晶のまま静かに目の前を光りながら落ちていく。兵隊たちは凍傷をおそれて、足踏みをしながら、古風で、もったいぶった言葉の羅列の終わるのを待った。我国ノ軍隊ハ世々、天皇ノ統率シ給フ所ニソアル…朕ハ大元帥ナルノ、サレハ朕ハ…朕ヲ…朕…朕の名のため、数多く人間が命を失った」\*と。この絵の背景に描かれているのは骸骨です。日付が1945年2月11日とあります。2月11日は紀元節、建国記念の日です。こちらは『一九四五』という絵です。解説文は「(中略)列車が奉天を出て北上を始めて間もなく、線路の脇に放置された死体を見た。日本人に違いない、衣服はなく皮膚ははがれ、異様な褐色の肌で人間の筋肉を示す赤い筋が全身に走って、教科書の解剖図の人体そのものの姿だった。帰国後写真で見た広島原爆の真っ黒焦げの死体と、満州で貨車から瞬間見た赤茶色の死体。2つの死体が1945年を語り尽くしていると思う」\*とあります。

\* 画集『香月泰男シベリア画文集』より

## 出典

ゲナディ・スマコフ著/阿部容子訳『パリシニコフ——故国を離れて』(新書館、1986年)

ナタリア・マカロワ著/ケイコ・キーン訳『ナタリア・マカロワ自伝』(新書館、1999年)

J.M.コレドール/佐藤良雄訳『カザルスとの対話』(白水社、1988年)

ジュリアン・ロイド・ウェッパ編/池田香代子訳『パブロ・カザルス 鳥の歌』(ちくま文庫、1996年)

アルバート・E・カーン編/吉田秀和・郷司敬吾訳『パブロ・カザルス 喜びと悲しみ』(朝日新聞社、1991年)

(2)亡命しなかった芸術家——ウラーワ、プリセツカヤ、フルトヴェングラー  
ダンスマガジン編『バレリーナは語る』(新書館、1997年)

マイヤ・プリセツカヤ著/山下健二訳『闘う白鳥——マイヤ・プリセツカヤ自伝』(文藝春秋、1996年)

脇圭平・芦津丈夫『フルトヴェングラー』(岩波新書、1984年)